
正しいクレーマーの対処法？

いちの こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しいクレイマーの対処法？

【Nコード】

N8730V

【作者名】

いちのくう

【あらすじ】

ゲームセンターでのクレイニングゲームの客。

『獲れないぞ』とのクレイマーに対する正しい対処法とは？

問題編

平成17年開通した『ルートAエクスプレス』。東京のA駅と茨城のT駅を結ぶ鉄道だ。

ちょうど中間にある『みなみのもり』駅は目の前の巨大ショッピングモールがシンボルの駅である。それを囲むようにマンションがポツポツと点在しているまだ開発途中の緑が多く残る街だ。

その日は夜明け前から激しい雨が降り続いていた。夜遅くまで続くと天気予報では言っていたその日はお出かけにはどう考えても不向きな日だった。

そんな中、東恭介と藍原桐子はデートを満喫していた。A駅で待ち合わせをして『みなみのもり』駅に向かう。

恭介はすでに何度か乗っているが、桐子は初めてだ。比較的まだ新しい路線と駅舎にちよつとテンションが上がる。景色が相も変わらず激しい雨で白くぼやけているのが残念だった。

巨大ショッピングモールへは駅出口から2階部分が屋根付きの連絡通路で繋がれており、まさしく目の前の距離だった。

1～3階が商業施設で、5～6階・屋上が駐車場エリア。車と電車の両方でアクセスできる事が賑わっている要因なのかもしれない。

2人はまず先週から公開された『真夏戦争』の映画鑑賞。昼はグルメ街のイタリアンのお店。雑貨屋で入浴剤を購入後、映画チケットの半券で遊べるゲームセンターへ向かった。

実は恭介はかなりのゲーマーだった。

だった、というのは今ではデート代節約のために抑えているが、かつては毎日通っているほどだった。主にやるのはマージャン、クイズ、クレーンゲーム、格闘系も少々。

特にクレーンゲームなんかは桐子にちよつといいところを見せる

チャンスである。

もう少しで目の前にゲーセンが……というところで何やら男の大きな声が聞こえた。その内容を聞いて恭介は顔をしかめた。

俗にいうクレーマーだ。半径5mほどの円を線で引いたかのように周囲の客が避けて通行して様子を見たり見なかったりしていた。

「どうやっても獲れないじゃないか。こんなゆるいアームでこの箱をどうやって持ち上げるんだ。お前やってみろ」

「実際にプレイするのはできない事になっております」

「獲り方見せないうえに、獲れるかも怪しい。こんな不親切な店は初めてだよ！ ああ、実に不愉快だ。かかったお金はどうしてくれるんだ！」

「獲り方を考えるのもゲームですし、また醍醐味でもあります。また既に獲得されたお客様もいらっしゃいます」

「お前は俺が下手だというのか！ だから獲れるならお前が実演してみろよ！ だったら納得してやるよ！」

「ですから——」

終始こんな感じらしい。

問題のクレーマーは50歳くらいの男性。白と紺のボーダーのポロシャツにベージュのズボン、革靴を履いている。足元にはひも付きの透明な大きな袋が2つ。外から丸見えの中身はいわゆる萌え系のフィギュアやぬいぐるみが多く数入っており、おっさんに似合いそうなセカンドバックやその他荷物は見当たらない。他にあるとすれば、見えはしないがズボンのポケットに入っていそうな財布と携帯くらいだろうか。

あまりに対照的な姿・言動から言えるのはキモイの一言だ。

そして店の前でこんなやりとり。明らかに迷惑行為だ。

「最近はこの店も1回200円なおかげで趣味の為に儉約生活しているというのに。わざわざ東京から電車に乗って来ている客にこん

ながっかりさせるなんて最低だな。粗相を詫びて景品をプレゼントするくらいの気持ちがここにはないのか！」

ここまで傍観していた恭介だったが、流石に我慢ならなかった。同じゲームを愛する者としてこのようなヤツの存在がどれだけ業界に迷惑をかけているかヤツは知っているわけがない。

馴染みの店でちょっと仲良くなった店員と何度か話したことがあったが、相当に困るらしい。ヤツらは自分の事しか考えていないのだ。お客様は神様でもヤツらは疫病神である。

恭介は2人をよそにその台を1回プレイしてアームの状態を確認してから、クレーマーに言った。

「なあ、なんであんな電車で来たなんてウソついたの？」

「はあ？ このガキ、お前誰だ。何を言っているんだ」

話を有耶無耶にして、すぐに否定しない。恭介はクロだと確信した。

そして男に言い放った。

「このプライズ（＝景品）は獲れるし、あんたは電車で来てないし、2度もウソについてあんたは何がしたいんだ」

どうも、作者です。

恭介がクレーマーが電車で来ていないと判断したきっかけは何だったのか？

そんなことを推理しながら読んでみると別の楽しみがあるかもしれません。

では、解決編へどうぞ。

解決編

「このプライズ（＝景品）は獲れるし、あんたは電車で来てないし、2度もウソをついてあんたは何がしたいんだ」

恭介は男、クレーマーに言い放った。

「失礼なヤツだな。電車で来てないなんてどうやってたらかるんだ」
もうこの時点で自白しているようなものである。男はそんな事を知らずに恭介との対応で必死のようだ。

「じゃあ、聞くけど。外はこんな雨だけど、傘はどうした？」

「……あ」

口から洩れた、少し気の抜けた声だった。

「確かに駅からここまでは通路があるから傘は使わないけど、自分が乗ってきた駅まで家からどうしたんだ？」

徐々に詰めるの状態になる。

「可能性としては傘をどこかに置き忘れてきたか、駅まで送迎してもらったか、駅直結のタワーマンションにでも住んでいるか……どれも苦しいな。さっきので自白しているようなものだしな。『電車で来てないなんてどうやってたらかるんだ』なんて本当に電車で来ているヤツが言う台詞じゃないもんね」

男の顔にうつすらと汗が浮き出ていた。

「……なんて追及は時間の無駄だな。車で来ているから傘があっても車内に置いてきた。ポケットに鍵があるんじゃないの？」

少し間があって男の反撃が始まるうとした。

「仮に、俺がウソをついているとしよう。でもこんな客に獲らせない台のこの店の対応なら仕方がないんじゃないか？　ほかの客が獲ったなんて言ってるが、そっちこそウソじゃないか。こんな獲らせの気がないゆるいアームでどう獲れっていうんだ」

そんな男の反撃は恭介にとって蟻のパンチみたいなものだった。ニヤリと微笑んで男に言い放った。

「いいや、獲れるね。あんたが下手なだけだよ。下手くそなクレマー！ほどたちの悪いことはないね」

恭介は店長に確認してお金を投入した。

店員のプレイはマナー違反となり無理だが、客である恭介のプレイを阻止する理由はない。

まずは横ボタン、そして縦ボタン。押した指を放してアームが開き、ゆっくりと下がっていく。そしてアームの先端の金属部（『ツメ』と呼ばれています）がわずかな箱の隙間に刺さった。そしてアームが上がると刺さったままの箱が持ち上がった。

「全てがつかむだけじゃないんだよ。アームが弱くても関係ない獲り方だってあるんだ。それが攻略する楽しみってものだろ？」

王手。詰みだ。

ウソもばれ、獲れることも証明された。男は2つの大きな景品袋を抱えると「覚えてろ」という昔ながらの捨て台詞を残して去っていった。おそらく男はもうここには来ないであろうし、出入り禁止になるだろう。

いつの間にか最初の3倍のギャラリーになっていた周囲から拍手が起こり、ちよつとした寸劇を見ているようだった。

恭介はその拍手に少し照れながらもまずすべきこと、店長に謝罪した。

「本当にすみませんでした。しゃしゃり出てしまつて」

「顔を上げてください。こちらの方こそ申し訳ありませんでした」

店長の口からは感謝の言葉が出てきた。が、その次にとてもやさしい口調で嚴重注意された。

それもそうだろう。従業員でもない1人の客が店内のトラブルに顔を突っ込んで先頭に立ち解決する。結果だけを見れば素晴らしいが、店には店の事情があり、ルールがある。それを無視して1人暴走するのは良いことではない。

「兄ちゃん、見ているこっちもスッキリしたよ」

「私も貴方に獲ってもらおうかしら」

先程まで観客としていたであろう老夫婦が恭介に話しかけてきた。その場を適当に濁して恭介はやっと舞台から降り、一般人となった。もう10分以上も放置していたのだ。それに自分がゲーマーであるのもばれてしまった。さぞかし彼女、桐子は怒っているに違いない。

キヨロキヨロと周囲を探すが姿が見えない。

「キヨウちゃん」

そんな声が聞こえた。プリクラの方に目をやると中に桐子がいて、手招きをしていた。

「こんなところにいたのか。……その、ゴメンな。ほったらかしにして」

手を合わせて深々と頭を下げた。そして頭を戻したのを見て桐子言う。

「もう、本当だよ。こんなかわいい彼女よりゲームが大事なの？」

腰に手をあてて、怒ったように半分笑いながら桐子がプンスカする。そしてその手をゆっくり下ろすと恭介の右腕を掴んで顔を預けてきた。

「でも、ちょっと格好よかったよ」

幸せ者のカップルがここにいた。

解決編（後書き）

まず、クレイニングゲームに詳しくない方、すみません。

本当は私をもっと詳しく説明すべきなんでしょうけど、イメージできない人は『蓋刺し』で調べてください。色々動画が載っているはずです。

この作品は別のサイトにて出題型推理クイズとして投稿したものです。

結果的にここでも出題型となりましたが、読み物であることを意識して再編しました。

そしてこの設定ではないのですが、私が実際に遭遇したクレイマーはこんなヤツでした。

そのクレイマー曰く、

『自分は1000人の従業員を抱える会社の社長である』

笑っちゃうほど「うそつけ!」と思いましたね。従業員1000人も抱える会社の社長が、休日に、1人で、クレイニングゲームにはまるわけがない。（すでに大きな袋2つ抱えていました）

『どんな社長だよ!』

『そんな会社で大丈夫なのかよ!』

『会社の社長がクレイマーかよ!』

『従業員がかわいそうだよ!』

自分はこっそり後をつけて住所を確認しようと思いましたが、あいにく時間がなかったもので断念しました。

そう、今回の恭介の行動は私の夢でもあったのです。

こんな怒りを元にこの作品はできました。

作品の内容もそうですが、クレイニングゲームの奥深さも知っていた

だければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8730v/>

正しいクレーマーの対処法？

2011年8月20日03時16分発行